

御所桜堀川夜討

弁慶上使の段(切)

さゝめき、出で迎ふ。

程もあらせず入り来たるは、堀川御所に隠れなき智仁勇のその骨柄、忠臣の鑑とは唐土の豫讓、我が朝にてその一人と呼ばれたる武蔵坊弁慶、縁塗取つて打ち被き、大紋の袴踏みしだき、しづくと打ち通り。

むづと座して一礼し、

「ホ、存じたとは違ふて、みずくとした御顔色、まづ安堵仕る」

と、申し上ぐれば

卿の君、

「オ、我が君様にも、御機嫌よくましますか」

とお詞あれば

武蔵坊、

るか生死の境。こゝをよく御合点なされ、兼ねて亡

き身と思し召さば、その期に臨んで不覚を取らぬ。ヤ

拍子に乗つて馬鹿な事を、アハ、ハ、ハ。さて肝心の御

内談遅なはる。ガこゝは端近、密々に御意得たし。し

かしあれに見馴れぬ女。わりや何者だ」

「ハイく、私はわさと申してこれなる腰元信夫が

母。卿の君様をお見舞ひに参りし者でござります」

と、言ふに

花の井引取つて、

「今あの者が申す通り、我が家の奥勤めも同じ事。

憚りながら、お心置きなく御内談」

「ア、イヤく、彼をはじめ女中方、間を隔て、遠慮

召され。サ、君様、奥方、侍従殿、奥へ参らうか」

「イザお通り」

「御案内」

と、卿の君を誘ひて侍従夫婦は先に立つ、

後に引添ふ武蔵坊、鎌倉殿の難題を、つい打ち明けて言

へば得に、暫く心奥の間に、打ち連れ伴ひ入りにける。

「ホ、その御仰せの健やかさ。これと申すも、侍従御夫婦の御介抱、御大切になさるゝ御苦勞の甲斐が見え、祝着に存するよ」

「これはく御挨拶。御主人ながら御平産あるまでは我が館に預かる卿の君様。義経公の御前、幾重にもお取り成し」

「ア、イヤく、取り成しには及ばぬ。全て物事の取り成しといつば、かなれ八合な事を十分に言ふが取り成し。この弁慶それ嫌ひ。見た通りを罷り帰り、真直ぐに申しなば、君にもさぞや御満足。ヤこれは御夫婦への話ではない。後学のため卿の君様へ御物語。ア、総じて勇士の戦場へ赴く時は、三忘と申して忘るゝ事三つあり。国を出づる時家を忘れ、境を過ぐる時妻子を忘れ、敵陣へ臨んでは我が身を忘るゝ。婦人の懐胎もまつその如く、すでに月満ち御産の紐を解かるゝは、かの勇士の敵陣へ駆け入つて、『ヤこれぞよき敵ござんなれ。逃すまじ』と引き組んで、首を取るか取るゝか、よい子を産むか得産まぬか、生きるか死ぬ

後打ち見遣り腰元信夫、

「さらばこの間にちよつとかゝさん、この頃はお顔も

見ず、お懐かしや」

と立ち寄れば、

「オ、そなたも息災で嬉しいく。ガこれ信夫、母が言ふ事よう聞きやゝ。たとへ御前の御意に入るとも、必ずく朋輩衆を袖にすな。出かし立てして嫉まるゝな。林の中でも高い木は風が枝をば折るぞとよ。一人寢覚めの度毎に、蓄めておいた数々も、逢へば嬉しうて口へは出ぬ。ガ何を言ふも身を大事に、コレ、煩ふてばし給んな」

と、手を取り交はす親と子の、わりなき風情ぞ道理なり。

やゝあつて侍従夫婦、奥より出づる屈託顔、

おわさ目早く、

「これはくお二方様、どうやらお顔の色悪う、お気の浮かぬ御容体。御内談とはマ何事でござります」

と、言ふに

花の井引き取つて、

「さればいの。今日武蔵殿参られしは『義経公、叛
逆人時忠の娘卿の君を妻と定め居るからは、これ同
腹。一味でなくば姫君の首討つて渡せ』と鎌倉殿の御
難題。小さいから夫婦の者が手塩にかけ、育て上げ
た姫君様、そもやお首が切りようか。なんと刃が
当てられう。殊にたゞならぬお身の上、弁慶殿も切り
兼ねてとつ置いつ思案の上、『お身代りを立てまい
か』『オ、それぞよろしき御分別。してその身代りは
誰彼』と詮議の上、年の頃、眉容姿、相応したこの信
夫。正真の背に腹とやら、コレ、了簡はあるまい、
か、夫婦の者の苦しみを、思ひ遣つて」
とばかりにて、かつばと伏して泣きければ、
夫も座したる膝を改め、

「浮世の中の無心といふに、これに上越す無心もある
まい。ガその返報には、夫婦の者を八つ裂きにもなさ
れ、サちつとも惜しまぬ。惜しまぬ命は二つあれど
も、一つも今日の役に立たぬ、本意なさ、無念さ、悲

「ノウコレ待つて下さりませ。偽り者と言はれては親
故この子の道立たず。顔も知らず名も知らぬ、夫を尋
ぬる証はこれ」
と、上の一重を押し脱げば、

右は変らぬ詰袖に、左ばかりが振袖の、濃き紅の染模
様、橘ならぬ袖の香の、昔床しく惚はしく。

「娘が聞く前恥しき昔話。元私は播州姫路の近在福井
村、本陣の某こそ私が父母。十八年以前、頃は夜も
長月、廿六夜の月待ちの夜、数多泊りのその中に、二
八余りの稚児姿。こつちに思へばその人も、擦れつ纏
れつ相生の、松と松との若緑、露の契りが縁の端。
オ、恥かしや、つい闇がりの転び寝に、つらや人の足
音に恋人も驚きて、起き行く袂控ゆるを振り切り急ぎ
行く拍子、千切れて我が手に残りしはこの振袖。仮寝
の情けは浅けれども、妹背の縁や深かりけん。その月
より身も重く懐胎し、後にて何と詮方も、産み落とせ
しはこの信夫。縁あればこそ子まで設けしもの。この
振袖を知る辺にて、再び尋ね逢はんと思ひ国を、国を

しさを推量あれ」

と、はらく涙、

始終の様子聞く信夫、涙を押へ傍に寄り、

「十歳に余る宮仕へも、たつた一日御奉公申しても、
お主様に違ひはない。不束な私でもお役にさへ立つ
ならば」

「ア、これく、母を差し置きつかく」と物言やん
な。ハイ、ハイく、イヤ申し、この子はアノ私一人
で出来た子ではござりませぬ。顔も知らず名も知らぬ
て、親がござります」

「ア、こりやく、まいかに狼狽ゆればとて、母親ば
かりで出来る子が三千世界にあらうかやい。その上、
顔も知らず名も知らぬ、て、親を尋ね手渡しすると
は、マ何を証に尋ぬるぞ。アノこゝな偽り者、表裏
者めがうぬ。子心にさへ主従の道を弁ふるに、エ、見
限り果てたる女め。娘を連れて早や帰れ。サ花の井こ
ちへ」
と立ち上る、

出で、十七年。嬰兒を抱へ様々と彷徨ひ廻りし憂き
艱難、今に尋ね逢はねども女の念力、これこそは『娘
よ』『父よ』と名乗り合ひするそれまでは、蚤にも喰
はさぬ大事の娘。お役に立てぬは右の訳。卑怯未練
でない申し訳。ナ申し、娘にはどうぞお隙を下さりま
せ。コレ信夫、立ちやく、エ、コレマ立ちやいの」
と言へど

立ち兼ね見捨て兼ね、親子心の隔ての一重、
始終立ち聞く武蔵坊、信夫が背骨障子越し、
『ぐつ』と刺いてひと多ぐり、
『ウン』と悶ゆる苦しみに、
『こはく、いかに、こはいかに』と、傍で見る目の三人
は、呆れ果てたるばかりなり。

母は泣くやら気は狂乱、
「さては、夫婦と言ひ合はせ、大事のく、娘をば、よ
うもく、惨たらしい。サ、元の様にして返しや」
と、武蔵にいつかと継り付き、泣くより外の詞なく。
真中に弁慶どつかと座し、

ぞ』と、こんなつらでも見せたらば、さぞ嬉しからうもの。こればかりが残念」

と、睨で払ふ包み泣き、

侍従夫婦が貰ひ泣き、

四人の涙八つの袖、八つの時計に打ち交せて、産れた時の産声より、他には泣かぬ弁慶が三十余年の溜め涙、一度に乱すぞ果てしなき。

武蔵は心取り直し、

「南無三宝、早や八つ時。サ太郎殿、卿の君の首討つて渡されよ」

「オ、心得たり」

と信夫が死骸引き寄せて、あへなく首を打ち落とし、返す刀で我が弓手の小脇にがはと突込んだり。

人々『これは』と立ち騒ぐ、

「ヤレ騒ぐまい、武蔵殿。我が切腹御合点が参らぬ

か。卿の君の乳人とは、鎌倉殿も知ろし召したる侍従

太郎がこの首を添えて渡さば、天地を見抜く梶原も身

代はりとはよも言ふまい。サア武蔵殿、時移る。早

く」

「オ、合点」

と抜き放し、ひらりと見えし刀の影、

首は前にぞ落ちにける。

立ち直つて大音声、

「ヤアく、門前に控えし者共、慥かに聞け。卿の君の御首、侍従太郎二つの首を、只今受け取り立ち帰る」

と、それと知らずも胸あつて、館へ響く唸り声。

すぐに袂を押し切りく、二つの首を、包むに余る目に漏るゝ、涙よ嘆き果てしなく、

「やらば」

「さらば」

と、首を左右に掻き抱き立ち上れば、

「コレノウ暫し」

と取り付いて、

「我れは未来の約束せん」

「我れは親子の一世の限り」

「共に名残に今一度、亡き顔見せてたべのう」

と、泣けど慕へど焦がるれど、

心強くも振り捨てゝ、見せぬも辛し見ぬも憂し、

帰らぬ道にあこがるゝ、

夫の別れ子の別れ、二つ嘆きを一筋に、

見捨てゝ御所へぞ立ち帰る